

野口英世記念医学賞を受賞して
筑波大学教授（71期） 澁谷 彰



千円札の肖像画でも知られる野口英世博士は、日本人に最も馴染みのある歴史上の医学者の一人であろう。囲炉裏で左手の指に大火傷を負いながらも、世界的な医学者となったという伝記は、ほとんどの子どもが読んだに違いない。

ない。博士は明治9年、福島県猪苗代町に生まれ、高等小学校を出てから上京し、医師となつた。明治33年、24歳で渡米し、ニューヨークにあるロックフェラー医学研究所で世界的な細菌学者となつた。博士の業績の中でも特筆すべきは、梅毒スピロヘータが脳脊髄神経を侵すことを直接証明したことである。後年、この業績で3回ノーベル賞候補となつてゐたことが判明している。しかし、ライフワークの一つである黄熱病の研究のため流行地であるガーナに赴いている最中、自ら黄熱病に罹患し、昭和3年、51歳で客死した。翌日からロックフェラー研究所は半旗を掲揚し、ニューヨークの新聞各紙は社説で弔意を表わしたという。

博士没後96年の昨年11月に、猪苗代湖にある野口英世記念館にて、第67回野口英世記念医学賞を頂戴した。昭和32年から始まったこの賞の歴代の受賞者は、ノーベル賞受賞者の本庶佑博士など、世界的な、錚々たる研究者の方々ばかりであり、私にとっては身に余る光栄である。

幼少の頃から病弱であつた私は、長じて横手高校に入学してからも1年ほどの入院生活を余儀なくされ、4年かけて卒業した。北